

栗生沢の水戸藩諸生党市川隊の足跡

明治元年9月23日、会津鶴ヶ城郭門の防戦後、9月4日まで鶴ヶ城内外に於いて奮戦した後、9月23日には水戸に向けて南会津郡栗生沢まで来て栗生沢の西北、須釜のぐずれで栗生沢の番兵に発見され、水戸藩兵とわかつて同集落に2日間宿泊し、25日早朝栃木県百村へ向けて同地を後にした。このことは田島町史資料集に、同地の湯田一意氏の写本（昭和31年5月13日、田茂山栄氏）があり、一気に百村へ入った。

ところでこの時、三斗小屋宿を通ったのか、通らなかったのかということである。その点を確かめるため、8月30日及び10月6日の2度に亘って同地を訪れ、関係の方々にお会いして確認をしたので、ご参考までに報告したい。

三斗小屋宿は、三斗小屋温泉の西側、徒歩1時間40分前後、那須岳の中腹斜面下であり、旧幕時代は会津中街道と呼ばれた交通の要衝であって栃木県百村（板室の隣接地）から深山湖の縁を通り三斗小屋宿、大峠、日暮滝、野際新田から田島へ出た道である。

栃木県と福島県を結ぶ道路は、この他に国道121号線がある。この道は所謂会津西街道で山王峠を境にして栃木、福島に跨がり日光街道とも呼ばれていたもので、主として奥州諸大名が参勤交替に利用したものであるがこれ以外は白河街道、茨城街道等北側に道があった。なお、この他に、明治元年の時点で三斗小屋宿を通る新線が造られたという記録があるが、この道は出点、終着点はほぼ同一であり、この時は、三斗小屋宿の他に更に2～3の中継点がつくられたようであるが10年後に廢道になったとある。

今、県道があるが、この道はどうなったのかと疑問も残る。

さて今まで、関係市町村史の戊辰戦争に於ける記述を見るとすべて三斗小屋を通過したと記しているが、小生が執拗に調査してきた過程からは「三斗小屋宿」は通過しなかったと言いたい。なぜなら、湯田一意氏の取り上げた史料にも「男鹿岳の肩」を越えたとあるからである。この男鹿岳の尾根からは、深山湖、百村はすぐ眼下に見下ろせる位置にあるからで、この地点から三斗小屋宿へ出るには、那須岳とそれに連なる山系の中腹を横走しなければならず、この距離は、男鹿岳から百村へ出る距離を一辺とした三角形の二辺の

距離にあたることと、一刻も早く水戸に向かおうとする市川隊にとっては、こんなところでモタモタするはずがないこと、「けもの道」ではあるが、栗生沢の男衆が道案内に各家から一人ずつ出ていて案内していること、新選組の隊士の書いた回想録に道のない藪の中を通らせられたと書いていることなどからである。

では各市町村史が三斗小屋宿を通つたかのように書いている点であるが、これは次のような書き方、表現をしていることである。一つは市川隊は暗夜というか、夜中に山中を通過し、早瀬百村に到着したことである。そのため「三斗小屋宿の方向に!」とか「三斗小屋宿のあたり」とか、「三斗小屋の方に」無数の松明を発見したと記しているのである。

それ故、この表現からでは極めてあいまいであるのと、もう一つ市川隊が村人によって通過した道が、深山湖の真上で、三斗小屋宿からくる道（大峠 — 三斗小屋）と合流して百村に出るからである。

このようなことから、簡単に「三斗小屋宿」を通過したと言う表現で記述されたものと解釈したい。兎も角、小生が調査した結果からは以上のような結論に到達したことを申し述べたい。

明春になったら、栗生沢の区長、湯田直美さんは湯田清さん共々、一度諸生党の通つた道を通ってみたいと言っておられたので、会員の方々の中にご希望の方がおられれば、湯田さん方とご一緒に歩いてみてはどうかと考えている。

この記事の採集に第1回目は稲田秀男氏、大森信男氏と小生、第2回目は稲田秀男氏、総引周一氏、大森信男氏、小生で実施しましたが、それ以前に弟大森信男と2人で、県道田島 — 百村線を軽ジープで走ってみました。これは栗生沢から男鹿岳の肩を通り、百村へ通ずる県道で、栗生沢の集落の中央を抜けて進みますと山林に入ります。林道は到る処に入山禁止、通行禁止の標識がたてられてあり、これを無視して進みますと一昨年の暴風でえぐられた処がかなりありました。道路は道幅3.5m~4.0mです。

ですから中型車なら通行可能です。途中には到る処にコンクリート製の橋がかけられ、断崖には、コンクリートの擁壁がつくられて整備されています。上り道では運転席の方は山の斜面、助手席の方は千鞆の谷底 — 50 — 60メートルの谷間で目もくらむような処で、

、 馴れないと極めて危険であることを付加します。

山の尾根の処で県境ですが、ガードレールで遮断して通行不能で引き返しましたが、栃木県側では深山湖の入口で交通止でした。板室の手前から三斗小屋宿には簡単に中型車までなら30分位で行けますが、熊が出る事、黒磯警察署では事前に入山届を出すようにとの事です。深山湖に流れ込む大川（那珂川の支流か？）の河原では各所でバーベキューを楽しんでいる姿が見られたのと、なつかしいことに電源関連の業者 — 深山発電所 — が大子の業者で水戸ナンバーの車が諸々に止つて作業をしていたこと、三斗小屋宿は都会の公園のように埃一つなく綺麗に整備されていたことで驚かされました。

また、入口に宿の人々の墓地があり、戊辰戦争の死者の墓もありましたが、現在は住民の人家は1軒もなく無人で、神社1、倉庫らしきものが2～3、別荘 — きわめて瀟洒な別別荘 — が10軒ぐらいたっていました、 — 無人 — また宿をはずれると「那珂川の源流」の立派な石碑があり、その先に橋があつて山道になり大峠へ続きますが徒歩でしか行けません。また、三斗小屋温泉へ荷物を運ぶ簡単なエスカレーターがあるとのこと、（綿引周一氏突見）です。三斗小屋宿には温泉の方（大黒屋、たばこ屋）の人が板室まで物資の買出に使う四輪駆動車が2台常時おかれているようですがご参考のために報告します。

平成12年10月25日

大森 信英 記

尚、三斗小屋宿あたりまではハイキングというか若い男女、犬をつれて父娘等が目につきました。手軽な軽登山コースなのか知りません。

水戸領に入った市川勢のその後

明治元年9月27日、佐良土で箒川を渡河して水戸領馬頭に入った市川隊は、大子に向かった、猪飼伝衛門の1隊と、直接水戸へ向かった主流の2手に別れた。

馬頭のどこで別れたか詳らかでないが、市川隊本隊は道を鷺子から、三賀峠、大岩、油河内、入本郷、長倉に出た。

この間、市川隊を迎撃すべく、馬頭にも水戸藩兵が出陣していたが、その行動は明らかではなく、大岩の本郷士、竹内源介が獵師、農兵等を従えて三賀峠で市川隊を迎撃した。市川隊は簡単にこれを撃破して長倉に出、那珂川の北側を野口、三美に到り、ここで小野河岸から那珂川を渡河して下阿野沢に上陸した。こゝでも市川隊を迎撃すべく、御前山に水戸藩兵が出陣していたが、市川隊はこれを察知して肩透かしを食らわせた。下阿野沢の付近には望月新十郎らが居たが少数のため、望月は兵を後退させ、徳宿幹茂の家に宿泊し朝食をしていた処を市川隊に襲撃されて戦死、大曾根、照山等は石塚まで退却して天這坂付近で戦死した。田治見荒次郎もこの時戦死したという。

執政大森多膳（大森弥三左衛門の本家）は約400余名を卒えて御前山まで出陣したが（ある本には馬頭とも）、同時に後退して渡里の金沢坂に到り堀原に陣して市川勢を迎撃しようとしたが、市川隊はこの時も大森の布陣を察知して間道を通り、水戸城に迫ったという。

馬頭から常北に到る戦闘の様子は市町村史を見る限り、馬頭、美和、緒川、等は記載がなく、また、各市町村史とも天狗に組した郷土、農民層の家が諸生派の人々によって略奪暴行の被害を受けたことについては、かなり詳細に述べているが、諸生派の方は薄井一族以外は全くふれていない。今回の下調査で、小室八郎家（下檜沢）、高部の岡山肇家が天狗派によつて被害にあつたことを知ったのみである。両家は福島、静岡に逃れ、明治6～7年帰村したという。

平成12年10月25日

大森 信英 記